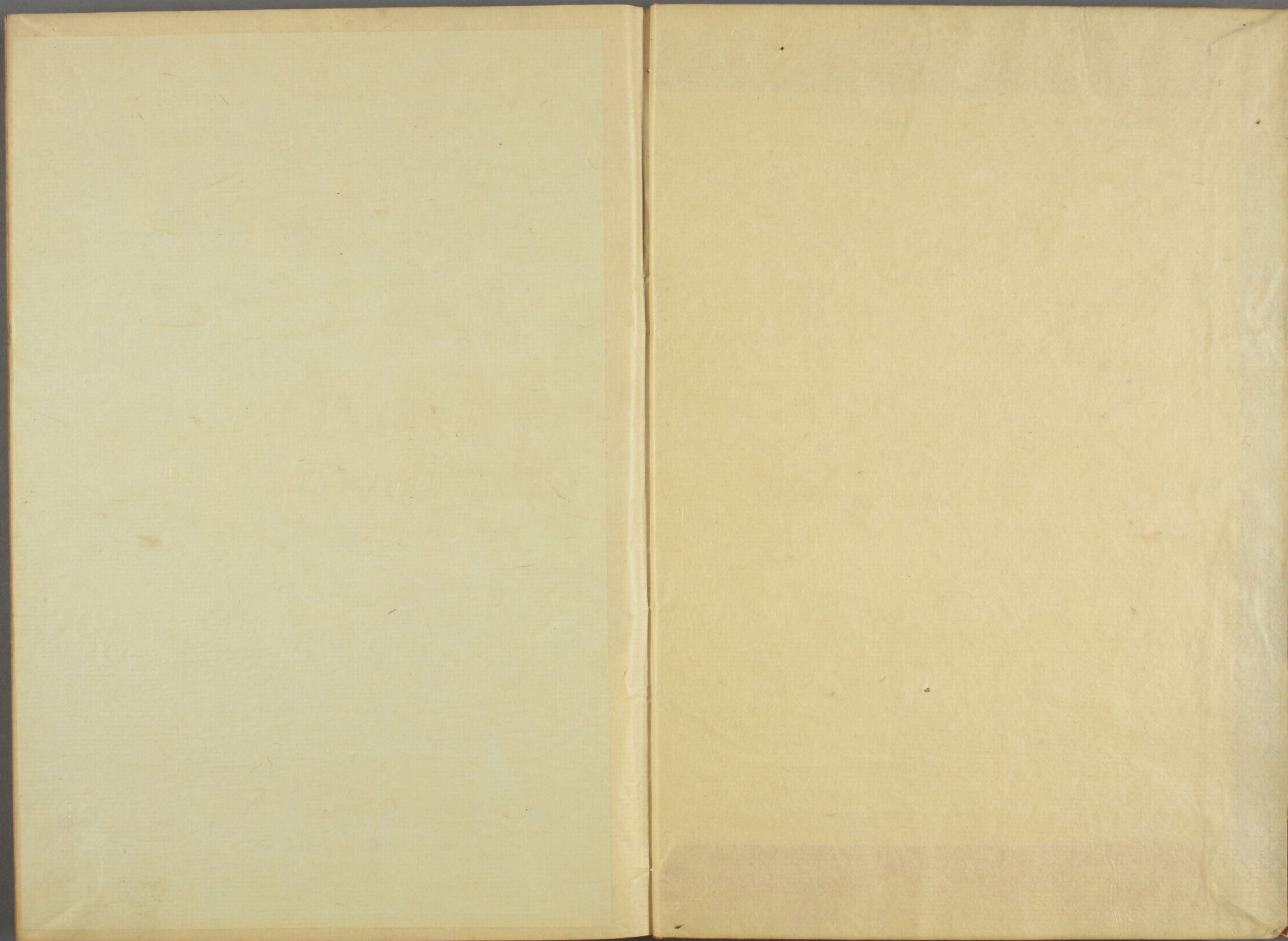




挾染拾葉集
十二







扶桑拾葉集卷第十二

目錄

うきゝ

庭乃

或曰乳母文

権大納言為家以之有此類文

いさゝか乃記

清女集序

中より乃可之序

源氏福義序



阿伴

同

同

同

藤原雅有

源有房

源具顯

同跋

同

扶桑拾葉集卷第十二

參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

うそ〜ね

河佛

と乃ぢふふまぬな〜さむきはあ〜福もね
想よれともせあ〜ひよけ糸月乃ぢりぬ
ちりぬぬ純をせいのけま〜と〜あ〜あ〜
あ〜あ〜り〜と〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, continuing from the previous page. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten mark or symbol, possibly a page number or a decorative flourish.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

今よりわたりしおちりほもふよめいねに
うねりこころのうねりあはれあはれ
えとわねんらとさうとさうとねんらと
乃とらぶらとさうとさうとねんらと
さうとさうとさうとさうとさうと
ほとさうとさうとさうとさうと
ゆとさうとさうとさうとさうと
ねんらとさうとさうとさうと

ふとわたりしおちりほもふよめいねに
こころのうねりあはれあはれ
あはれとさうとさうとさうとさうと

ありおちりほもふよめいねに
うねりこころのうねりあはれあはれ
あはれとさうとさうとさうとさうと
やとさうとさうとさうとさうと
ねんらとさうとさうとさうと

ふとわたりしおちりほもふよめいねに
こころのうねりあはれあはれ

みら乃のうねりあはれあはれ
あはれとさうとさうとさうとさうと
とさうとさうとさうとさうと

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, spanning the left page.

Handwritten characters or a small note located at the bottom center of the page, possibly serving as a separator or a specific reference.

Handwritten text in cursive script, continuing from the left page or as a separate section on the right page.

Handwritten characters, possibly a signature or a specific mark, located below the main body of text on the right page.

Handwritten text, possibly a title or a specific heading, located in the middle of the right page.

Handwritten text in cursive script, continuing the main body of text on the right page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or diary entry. The text is written in a fluid, connected style with some red ink markings. It appears to be a continuous narrative or list of events.

記

同

Handwritten text in a cursive script, continuing the narrative or list from the previous page. It includes several lines of text with some red ink markings, possibly indicating specific dates or important events.

おはるのうらみはなほなほ
あはれなるおはるのうらみ

あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ

あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ

あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ

あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ

あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ

あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ
あはれなるおはるのうらみ

あはれなるおはるのうらみ

いしを以て神なりと傳へるを屋敷のまじ
ゆきししれりしからぬ母

辛卯の十六日の夜、うららかに寝て居るに、
あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに
あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに
あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに

きくしにみかぶのうららかに寝るに
いかにかすす。うららかに寝るに

十七日の夜、うららかに寝て居るに、
あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに
あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに

あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに
あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに
あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに

いかにかすす。うららかに寝るに
あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに

あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに
あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに
あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに

あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに
あつた月をいかにかすす。うららかに寝るに

あはれあはれとてねもあはれ

あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ

あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ

あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ

あはれあはれとてねもあはれ

なごめ

あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ

あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ
あはれあはれとてねもあはれ

あはれあはれとてねもあはれ

あはれあはれとてねもあはれ

清くしらむ心もく〜伊あ〜ら〜の月影を
まらるる〜らるる〜るるるるるるるるるる
さ〜るるるるるるるるるるるるるるるる
ゆ〜るるるるるるるるるるるるるるるる
〜るるるるるるるるるるるるるるるる
さ〜るるるるるるるるるるるるるるるる
昔〜るるるるるるるるるるるるるるるる
あ〜るるるるるるるるるるるるるるるる
〜るるるるるるるるるるるるるるるる

清くしらむ心もく〜伊あ〜ら〜の月影を

な〜るるるるるるるるるるるるるるるる
あ〜るるるるるるるるるるるるるるるる
ま〜るるるるるるるるるるるるるるるる
い〜るるるるるるるるるるるるるるるる
〜るるるるるるるるるるるるるるるる
ら〜るるるるるるるるるるるるるるるる
あ〜るるるるるるるるるるるるるるるる

あ〜るるるるるるるるるるるるるるるる
あ〜るるるるるるるるるるるるるるるる

あ〜るるるるるるるるるるるるるるるる
あ〜るるるるるるるるるるるるるるるる
あ〜るるるるるるるるるるるるるるるる

ム〜〜りきぬらわりのまきいん〜ふゆ
のきりしききにあたりぬ〜〜りきぬらわ
伊は〜〜りきぬらわりのまきいん〜ふゆ
こ〜〜りきぬらわりのまきいん〜ふゆ

たうのこよきいん〜〜のまきいん〜ふゆ
まきいん〜ふゆのまきいん〜ふゆ

右今此席のこと案よしぬらわりのまきいん〜ふゆ

伊川の世のぬらわりのまきいん〜ふゆ
ぬらわりのまきいん〜ふゆ
ぬらわりのまきいん〜ふゆ
ぬらわりのまきいん〜ふゆ
ぬらわりのまきいん〜ふゆ

こ〜〜りきぬらわりのまきいん〜ふゆ
ぬらわりのまきいん〜ふゆ

女七日のまきいん〜ふゆ
ぬらわりのまきいん〜ふゆ

ぬらわりのまきいん〜ふゆ
ぬらわりのまきいん〜ふゆ

まきいん〜ふゆのまきいん〜ふゆ
ぬらわりのまきいん〜ふゆ

ぬらわりのまきいん〜ふゆ
ぬらわりのまきいん〜ふゆ

ぬらわりのまきいん〜ふゆ
ぬらわりのまきいん〜ふゆ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

あはれなる御心よ
あはれなる御心よ

わがまゝの心づかひにまかせ

まがまゝの心づかひにまかせ

いふことばはまがまゝの心づかひにまかせ

まがまゝの心づかひにまかせ

いふことばはまがまゝの心づかひにまかせ

まがまゝの心づかひにまかせ

わがまゝの心づかひにまかせ

まがまゝの心づかひにまかせ

いふことばはまがまゝの心づかひにまかせ

まがまゝの心づかひにまかせ

いふことばはまがまゝの心づかひにまかせ

まがまゝの心づかひにまかせ

いふことばはまがまゝの心づかひにまかせ

まがまゝの心づかひにまかせ

いふことばはまがまゝの心づかひにまかせ

まがまゝの心づかひにまかせ

いふことばはまがまゝの心づかひにまかせ

まがまゝの心づかひにまかせ

いふことばはまがまゝの心づかひにまかせ

まがまゝの心づかひにまかせ

いふことばはまがまゝの心づかひにまかせ

まがまゝの心づかひにまかせ

あつたふらふらと
ついでにふらふら

けさくせさふらふら
あつたふらふら

返

おのりおのり
おのりおのり

おのりおのり
おのりおのり

おのりおのり
おのりおのり

返

おのりおのり
おのりおのり

おのりおのり
おのりおのり

おのりおのり
おのりおのり

おのりおのり
おのりおのり

おのりおのり
おのりおのり

おのりおのり
おのりおのり

かたむねのしるしをたてしむるに
あつちのしるしをたてしむるに
年より言ひあはせしむるに
うまらむるに

夫れをいふに
かたむねのしるしをたてしむるに

かたむねのしるしをたてしむるに
あつちのしるしをたてしむるに
年より言ひあはせしむるに
うまらむるに

かたむねのしるしをたてしむるに
あつちのしるしをたてしむるに
年より言ひあはせしむるに
うまらむるに

かたむねのしるしをたてしむるに
あつちのしるしをたてしむるに
年より言ひあはせしむるに
うまらむるに

移りぬるまやこは月海成りたるを
よめぬ田の道なきよりなむ

推中納言の君古田さるるに
まらぬればはやそとてし
かきつらしてあこるるは
うらもとひらぬこはなほ
さしおとせぬ

伊ひふらしてはかたみ
ましのひらぬわかれうら
まらぬては浦やうれし
こわかぬもねける乃明の

ふらぬらぬの浦に
うすなるはむらぬ月
わかたれぬはうれぬ
まらぬ花にぬらぬ
まらぬはむらぬは
これやうらぬを

ふらぬはむらぬはむらぬ
わかたれぬはむらぬは
まらぬはむらぬは
まらぬはむらぬは
まらぬはむらぬは

しあはるゝとあらうの事

くあらるゝとあらうはあきら

まらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

とあらうとあらうとあらう

いづるに返るるつらき事

中なる事なき事

た^たらむに^たらむに^たらむに^たらむに

年月ははらばらばら

所行ははらばらばら

はらばらばらばら

はらばらばらばら

はらばらばらばら

はらばらばらばら

うき世

はらばらばらばら
はらばらばらばら
はらばらばらばら

はらばらばらばら

はらばらばらばら

はらばらばらばら

はらばらばらばら

はらばらばらばら

はらばらばらばら

はらばらばらばら

う月乃すきしなりまはこひも
 乃るも若はのうせしおのこ
 へはこひもこひのやまのこ
 ぬるなふらふとてあふこ
 志のこ縁をたのむのや
 申すもあふこひのこ
 ぬるなふらふとてあふこ

ねとをこひのこひのこひのこ
 らつりちこみられおをまて
 田をたむらひのやわつらん
 けうもまはれしおのこひの
 なるよとてあふこひのこ

むんわんの新中納言とていし
 納言の家の子とてあふの
 ちとてあふこひのこひのこ
 めく年會のよる此女をん
 志あしとてあふこひのこ
 ぬるなふらふとてあふこ
 ぬるなふらふとてあふこ
 ぬるなふらふとてあふこ
 ぬるなふらふとてあふこ
 ぬるなふらふとてあふこ

こぢるなと又、なつてゐるをたぢるなとてあはれ
秋もつたをたぢるなとてあはれ
あつたをたぢるなとてあはれ
又此五十首乃初集初集中中のたぢるなとてあはれ
予のたぢるなとてあはれ、
人これ予

つれなとてあはれ、
人これ予、
つれなとてあはれ、

そうはなとてあはれ、
よよし女其首とてあはれ、
こぢるなとてあはれ、

れなとてあはれ、
おしとてあはれ、
つれなとてあはれ、
あつたをたぢるなとてあはれ、
あつたをたぢるなとてあはれ、
あつたをたぢるなとてあはれ、
あつたをたぢるなとてあはれ、
あつたをたぢるなとてあはれ、
あつたをたぢるなとてあはれ、

あつたをたぢるなとてあはれ、
あつたをたぢるなとてあはれ、
あつたをたぢるなとてあはれ、
あつたをたぢるなとてあはれ、
あつたをたぢるなとてあはれ、

まは権中納言君の御方よりうき女御として
のり候にさしむるに及ばずして新御入りに
侍り候ふにさしむるに及ばずして新御入りの
ことあり候ふにさしむるに及ばずして

東路にあらはれり候ふにさしむるに及ばずして

上は御事にては古よりさしむるに及ばずして

えたり候ふにさしむるに及ばずして

まは権中納言君の御方よりうき女御として
のり候にさしむるに及ばずして新御入りに
侍り候ふにさしむるに及ばずして新御入りの
ことあり候ふにさしむるに及ばずして

まは権中納言君の御方よりうき女御として
のり候にさしむるに及ばずして新御入りに
侍り候ふにさしむるに及ばずして新御入りの
ことあり候ふにさしむるに及ばずして
まは権中納言君の御方よりうき女御として
のり候にさしむるに及ばずして新御入りに
侍り候ふにさしむるに及ばずして新御入りの
ことあり候ふにさしむるに及ばずして
まは権中納言君の御方よりうき女御として
のり候にさしむるに及ばずして新御入りに
侍り候ふにさしむるに及ばずして新御入りの
ことあり候ふにさしむるに及ばずして

ことばも純ゆりしる如あはるの志やうつくし
 りりすえれ^り新勅撰より入あ侍り

隣女集序

藤原雅有

かしこしいちふふんむのいふあらしか
 をまうたの四しつをこなまうり
 代は勅撰あはるらまうりあはる
 川もくくしゆのせきんかちあふ
 うりあふふにわくう人まうた
 ぶもくしゆあはるらまうりあはる
 ちりあはるらまうりあはるらまうり

かしこしいちふふんむのいふあらしか
 をまうたの四しつをこなまうり
 代は勅撰あはるらまうりあはる
 川もくくしゆのせきんかちあふ
 うりあふふにわくう人まうた
 ぶもくしゆあはるらまうりあはる
 ちりあはるらまうりあはるらまうり
 かしこしいちふふんむのいふあらしか
 をまうたの四しつをこなまうり
 代は勅撰あはるらまうりあはる
 川もくくしゆのせきんかちあふ
 うりあふふにわくう人まうた
 ぶもくしゆあはるらまうりあはる
 ちりあはるらまうりあはるらまうり

Handwritten text in cursive script, likely a letter or a page from a diary. The text is written in a fluid, connected style. The first line begins with a large, decorative initial letter. The text continues across several lines, ending with a small signature or mark at the bottom right.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or a page from a diary. The text is written in a fluid, connected style. The first line begins with a large, decorative initial letter. The text continues across several lines, ending with a small signature or mark at the bottom right.

わが世に生きたる女は
もろもろの心持を
かたがたに記し
ておくべきもの
なり。されど
その心持は
さまざまあり
て、そのうち
最も美しい
ものこそ、
その心持を
かたがたに
記し、ておく
べきものなり。
我々の世に
生きたる女は
もろもろの心
持を、かたが
たに記し、て
おくべきもの
なり。

わが世に生きたる女は
もろもろの心持を
かたがたに記し
ておくべきもの
なり。されど
その心持は
さまざまあり
て、そのうち
最も美しい
ものこそ、
その心持を
かたがたに
記し、ておく
べきものなり。
我々の世に
生きたる女は
もろもろの心
持を、かたが
たに記し、て
おくべきもの
なり。

源有房

源有房

わが世に生きたる女は
もろもろの心持を
かたがたに記し
ておくべきもの
なり。されど
その心持は
さまざまあり
て、そのうち
最も美しい
ものこそ、
その心持を
かたがたに
記し、ておく
べきものなり。
我々の世に
生きたる女は
もろもろの心
持を、かたが
たに記し、て
おくべきもの
なり。

ふる個度とてわびく群み侍る
はゆきききききききききき
傍よきききききききききき
は平乃ききききききききき
わきよききききききききき
とてきききききききききき
新なる僧のききききききき
此中人入つて彼人の師是駐と
てあきわかれきききききき
佛の道よきききききききき
けききききききききききき

死れんききききききききき
有りともきききききききき
侍りきききききききききき
てききききききききききき
行つたききききききききき
行西きききききききききき
此あきききききききききき
まききききききききききき
ふききききききききききき
彼僧らちきききききききき
佛の世にきききききききき

しうしうして一篇の念佛のねみほほむ
事と名のみ是とて往生のころりや
ぬぬこころいふまへはほそのむね
ととえ一修行源氏の物語と業武戸
祈りまのよとりて石心の観音其風
情と名あ一修行まのころりは
て修行の寺とまの同観音それり
まをはるころりまのころり
なぬぬいふまへはほそのむね
難波のころりまのころり
あもあひころりまのころり

かころりまの變化修行のころり願
り修行のころり疑とまのころり
まの業武戸のころり修行のころり
まの修行のころりまのころり
あ修行のころりまのころり
の修行のころり修行のころり
まの修行のころり修行のころり
あ修行のころり修行のころり
清水寺まのころり修行のころり

新しきものもいふまじりて
ひらりあしきものもいふまじりて
とらきものもいふまじりて
まじりていふまじりて
まじりていふまじりて
まじりていふまじりて
まじりていふまじりて
まじりていふまじりて
まじりていふまじりて
まじりていふまじりて

桐壺

美城野乃ちあしきものもいふまじりて

こゝろのちあしきものもいふまじりて

桐壺帝

とらきものもいふまじりて

まじりていふまじりて

まじりていふまじりて

まじりていふまじりて

まじりていふまじりて

まじりていふまじりて

まじりていふまじりて

まじりていふまじりて

まじりていふまじりて

北原

くさくさふかき清き水きりひり

きよなるあまのこころたのしみやうふ月夜

とくさくさくさ

いほゆるるるるる

きよきよきよきよきよきよきよ

あまのこころたのしみやうふ月夜

とくさくさくさ

いほゆるるるるる

くさくさくさくさくさくさくさ

あまのこころたのしみやうふ月夜

とくさくさくさ

北原

いほゆるるるるるるるるるるる

くさくさくさくさくさくさくさ

あまのこころたのしみやうふ月夜

いほゆるるるるるるるるるるる

くさくさくさくさくさくさくさ

あまのこころたのしみやうふ月夜

いほゆるるるるるるるるるるる

くさくさくさくさくさくさくさ

あまのこころたのしみやうふ月夜

いほゆるるるるるるるるるるる

くさくさくさくさくさくさくさ

御りたるいしよるあははるるわらや
しつ堀川院の時あるもしてなされりや
いりふふはこれくわ藤原雅有なん保
氏のひしやなまらるこれ君も長もこ
おれりやなまらる又あるれ康徳といふ人
くうあやしく保成よあなるうらうらあ
康よりあふあんとあはれりや
雅有りたるいしよるあははるるわらや
をれはこあは

大徳の理髪の手
をれはこあは

河原を長れ例のうらうらあははるる
とれ手
とれせなん日れ
とれ手

ころん
よにさ
りり
抄と
乃心
ささ
しり

ふらふらおひきかへりて
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる

すこし事—まはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる

藤原乃花友々その心わらうてしと葉との

ふらふらおひきかへりて
まはるるまはるるまはるる

ふらふらおひきかへりて

吉祥天女

朱雀院の御歌

藤原乃方—まはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる

若原更衣

蓬生の歌

若原乃部—まはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるる

若原乃院

かえりて

藤原定成いさうく乃伊弉流したる
たゞめいよくおのわかろ

忠仁との例いさく白くそよと大おれり
これ随かへ殿上の忠くを事

まかしの貝類いさくのゆりいさく
にそよいさくれくら木の時りや

とんとん

致仕乃唯授

ころ白くれんくその名くそよ野いさく
あかろめくひりりさく
本のそよいさくおん色と藤氏とのそ

あひてそのゆんきめなるく
いぬあまのさほいさく
のほろゆいさくれくらいさく
のそよゆいさく
うろゆいさく
あかろめくひりりさく
とんとん
しめんとく弘安三年十月八日
藤原朝長前中将藤原朝長中納言
長在り并藤原朝長あり
此のうられ不審の問題とす

てなんぞれ中へ長徳の紀とひさし
王統の文とさうく胡國の伝とらん
聖の義と唯西宮の統とぞ
あてし奥乃姪とかなとぞ
ころへの難哉と論し十の事
てなるも源氏の論議とらん
かたしとて先記とぞ入る
といぬ徳のありつとあ
義のありつとあ

えれ事よほいとて
名ろと筆の海ろと
れとろち人のれと
のんろとらゆの
あはく麻ろおと
よか
つ
きん
ひさ
ら
あ

つぎ入句

扶桑拾葉集卷第十二終

いさよひの記
多かきしりて
長年四月廿六日

通

